

**華 愛華**  
**(Hua Aihua)**



華東師範大学準教授

華東師範大学就学前学部部長、中国就学前研究会理事、遊びとおもちゃ専門委員会主任、中国陶行知研究会就学前専門委員会主任。

20年余り就学前の現場や研究活動に従事している。研究領域：就学前基本理論、0～3歳児の早期教育指導、就学前の子どもの遊び。担当する研究プロジェクト：幼稚園の遊びに関するカリキュラムの研究、教師が提供する素材と幼児の遊び行動との相関関係研究、0-3歳児の早期ケアと発達に関する研究、幼稚園教材研究制度の研究など。

主な著書：『幼児の遊び理論』、『就学前改革のヒント』、『教化と造化の知恵』など。発表した主な論文：遊びのニーズと子どもの人格発達、幼稚園の環境デザインと教育価値の傾向、幼児教育の中の遊びなど多数。

---

### 幼稚園教育での遊び

本来、遊びと教育は異なるものであるが、遊びには子どもの発達を促進する作用があることから、教育者が遊びの効果を利用したのである。しかし、遊びが教育者の道具になると、遊び本来の目的でなく、特定の目的として使われてしまうので、遊び本来のもっとも本質的な自由が奪われてしまうことになる。

幼稚園での教育重視の視点での遊びに、いま、主に二つの誤りがある。

1つ目は、遊びに対する感情価値と認知価値を対立させたことである。一方の考え方では、遊びの感情価値を強調し、教師は子どもの遊びに一切関与しない。他方では、遊びの認知価値を追及し、教師は遊びに必要以上に干渉し、遊ぶ意義をなくしてしまう。

2つ目は、偽りの遊びを本当の遊びに変えることである。幼稚園カリキュラム改革の理念では、「幼稚園は遊びを基本的活動にすべし」である。しかし、幼稚園は就学前教育の一つであり、教育活動は必然のものであるので、遊びと教育という二つの異なる活動を融合するために、次のような考え方になろう：「基本」は遊びの形式で教育活動を展開しているが、「遊びを基本活動とする」ということは、遊びと教育を融合することとなる。結果、たくさんの偽りの遊びと賑やかな教育（発達よりパフォーマンスを重視する授業）が行われ、本来の自由な遊びは保障されていない。

欧米諸国では提唱しなくとも、幼稚園は遊びを基本としているが、なぜ我が国では、提唱しているにもかかわらず、実現できないのか。その原因は文化の影響にある。西側諸国は個性を強調し、遊びが自由と独自性を表現できることから、「遊びこそ、学習である」と考え、子どもは遊びを通じて、様々なことを体験できる。何を学んだか、どのぐらい学んだかについては、深く追及する必要もないと考える。しかし、我が国では、人々は「一生懸命頑張れば、学業は進歩するが、遊んでいれば、学業は荒廃してしまう。」という潜在意識がある。いま、教育機関で遊びを基本活動とするように提唱しているが、せいぜい「寓教于楽（遊びの中で教える）」にすぎない。現実には「教えることに遊びなし」、「遊びがあれば、教育なし」という結果を招いた。

「楽」すなわち遊びである。「寓教于楽（教えることを遊びの中に取り込む）」ことは、教育を遊びの中に入れることである。このような遊びは功利性目的があり、教育的な効果を上げることが求めているので、教師は教育的目的を達成するために、遊びを手段としている。「遊び」の本来の意味がなくなってしまうのである。

ここで、私は遊びを保障する立場から、「寓学于楽（遊びの中で学ぶ）」ことを提唱する。わずか一文字の違いだが、意義がまったく異なる。「学ぶ」とは、幼児の立場からの言葉であり、教師は遊びの空間を提供し、遊びの時間を保障し、遊びの素材を用意することで、子どもを自由に遊ばせる。遊ぶ環境の中で、たくさんの学ぶ情報が含まれており、子どもは遊びの中で、自発的、無意識的に学ぶことができる。このような学習の結果は定まったものではなく、子どもによって、得るものも異なるが、重要なことである。このような活動を見守りながら、子どもの学習に気づき、幼児の異なるレベルの個々の発達をサポートしていくことが教師の果たすべき役割である。